

「わが村は美しく —北海道」運動

第2回コンクール

入賞団体を訪ねて

第5回



「わが村は美しく—北海道」運動第2回コンクール（北海道開発局主催）には、全道197件もの応募があり、景観、地域特産品、人の交流の3部門に分かれて審査・選考が行われ、平成17年2月25日には表彰式が行われました。

本シリーズでは、この受賞21団体の活動現場の訪問レポートをコンクール審査委員の方々にまとめていただきます。

栗山で繰り広げられる協働による 「ハサンベツ里山づくり」

人の交流部門・金賞
景観部門・特別賞

ハサンベツ里山づくり20年計画実行委員会（栗山町）

レポーター 野本 健

栗山町は札幌から車で小1時間、平坦地には水田、丘陵地には畑作や施設園芸が営まれている農業のまちである。ため池や沢地の緑も豊富なゆるやかな丘陵に囲まれた地形は、いわゆる北海道の雄大な農村景観とは異なる穏やかな景観を形成し落ち着いた雰囲気醸し出している。

また、栗山の多彩な取り組みの中でも、「いきものの里づくり」は、自然環境保全にかかわる取り組みで高い評価を得ており、その象徴が国蝶オオムラサキ*である。

その栗山にまた新たな魅力が加わろうとしている。水田離農跡の小さな沢、ハサンベツでの



ハサンベツの沢に里山づくりが進む。整備された活動拠点「里山センター」(左)、バイオトイレ(中央手前)や水田、畑、が見える。里山センターの陰には水車、炭焼き窯。

里山づくりである。

親しみやすく手がけやすい「里山づくり」

ハサンベツでの取り組みは、「ハサンベツ里山づくり20年計画」にもとづき、一つの沢丸ごと、場所それぞれの生態的土地条件を活かし、小川、水田、畑、湿原などで構成される里山・ふるさとの川を皆で協力して再生していくものである。

この「ハサンベツ里山づくり」では、栗山町全住民の取り組みとしていくために、童謡の歌詞の一部、「春の小川はサラサラ」、「ホーホーホタルこい」、「夕焼け小焼けの赤トンボ」、「菜の花畑に入り日うすれ」などをとって名づけられたプロジェクトによって、童謡の情景そのものが形づくられようとしている。

ともすると、大人がノスタルジーからひと昔前の農村風景を再現する巨大な箱庭をつくっているようでもあるが、実はしっかりと検討され、身近な自然を残すことの意義や次代をつくる子供たちの教育、循環型社会づくりなど多面的なコンセプトをもとにした、町民と訪れる人との協働による里山づくりの具体化と継承なのである。

再生されるのは人のビオトープ

毎月第2日曜を里山の日と定め、その日には声かけもなしにこの里山づくりに町内外から老若男女数十人が集まってくる。6月は近隣の野生植物から種を採取し実生から育てたノハナショウブやヒオウギアヤメなどの苗の植栽である。携わる人々の笑いとともに復元されていく湿原ビオトープ。

初めて参加した人たちも和気あいあいとみんな作業を進めるうちに長い付き合いの友達のようになる。会長の飯塚修さんという「形にな

*オオムラサキ：タテハチョウ科のチョウ。大型で、雄の翅には美しい紫色部があり、開張9cm。1957年日本の国蝶に指定。



実生から育てた湿性植物の苗を選んで再生湿地に運ぶ。「これは何の苗？私は何回聞いても間違えそう」と和気あいあい。みんなが先生、みんなが生徒。

らなくとも、自然に親しみ健康でいられ、みんなが仲良しになれば、それがかけがえのない財産」と。ここは、多様な方々が交流・共生できる人のビオトープでもあるのだろう。

「20年計画」を可能にする地域の風土

平成13年に設立された「ハサンベツ里山づくり20年計画実行委員会」は、これまでも栗山町でそれぞれ活躍している多彩な会の緩やかな集合体でもある。「栗山オオムラサキの会」、「おっ鳥クラブ」、「御大師山を愛する会」、「ウォーターリフォームの会」などなど、それぞれの分野の専門的知見と豊富な経験を有する人材を擁していることが、活動を科学的にし、そして初めての方にも取り組みやすいものとしている。

平成14年には町民500円募金により活動拠点「里山センター」を建設、町民有志による50haの隣接雑木林の寄贈など、まさに町ぐるみ、町民手作りによる取り組みでもある。

このような取り組みを可能にしたのは、身近な自然観察や自然環境保全の取り組みなどを通して築き上げてきたそれぞれの会の活動とともに、それらが緩やかに連携し協力しあいまちづくりを行ってきた経緯の所産であり、また側面からの支援を惜しまない町行政との連携によるものでもある。

多くの評価される取り組みは地道な活動の上に築きあげられるものだが、ハサンベツでの取り組みも、それ以前の長い間のこうした取り組みを通して醸成されてきた地域風土があってこそ結実したものである。

湯地の丘自然農園などの多彩な資源と人々

ハサンベツと隣り合う湯地の丘は、栗山の農村景観を眺望できるロケーションを生かした市民農園が催され、地域内外からの人が農業体験・交流を楽しむ。農作業条件としては不利な丘陵

地ではあるが、農業生産の向上と都市との交流の実現に向け農業生産法人化を行った淵野さんらは、夢を形にするために一步踏み出している。収穫祭では、ベニアカリの馬鈴薯のみを使ったお好み焼きなどでもてなし、その年の出来不出来を話題にみんなで収穫の喜びを分かち合い、農産物とともに心の収穫を共にする。

オオムラサキの御大師山、ハサンベツの里山づくり、湯地の丘自然農園など栗山町全体に広がる緑のネットワークは、町内外との交流による人々の心のネットワークによって支えられている。

栗山町は、自然観察拠点ファールブルの森、小林酒造の蔵を利用したレストラン、幾つもの陶芸の窯など多様な資源にも恵まれた地域であり、都市部からの体験や小旅行にも適した町であるが、このような取り組みを進めている多彩な人々の気持ちと笑顔こそが、地域の景観や環境を保全し、正しい交流の源になっているのである。

ここ栗山町には、「住民参加」や「グラウンドワーク」といった言葉はないといってよい。「町になにかしてもらうのではなく、われわれが町に何ができるのかを考えて取り組んでいる」と、飯塚さんは何のてらいもなくいう。町内で行われてきたさまざまなこれまでの長い取り組みを通して、これらの活動は地域と暮らしに溶け込み日常化しているのである。

「クリーン農業ななえは野菜の夢産地」を合い言葉に

景観部門・銅賞

七飯町野菜生産出荷組合（七飯町）

レポーター 中井 和子

七飯町の農業の歴史は古く、男爵いもなど北海道の西洋農業発祥の地として有名です。温暖な気候と南斜面の立地など恵まれた条件のもとで、米、野菜、果樹、畜産を重点とする農業経営を育んできました。七飯町野菜生産出荷組合は、水田から野菜生産へと転作が急速に拡大し始めた昭和45年に設立されました。大根・人參の根菜類を中心にほうれん草・長ネギが四大生産品目ですが、特に大根・人參の2品目で全体の約60%を占めます。温暖で積雪の少ない気候



一面のマリーゴールド畑

を生かし年二作の集約的農業形態をとり、小規模耕地面積の一戸当たりの収穫増加を図っています。しかし、平成3年頃より「キタネグサレセンチュウ」の被害が顕在化し、作物の品質低下が問題となってきました。

対抗植物による防除効果をねらい

そこで、七飯町の4Hクラブが農薬を用いた土壌消毒ではなく、対抗植物により有害線虫を防除し、品質向上をはかる栽培手法に着手します。

当時七飯町では、緑肥効果も兼ねてヘイオーツが多く栽培されてきましたが、有害線虫の低減効果が高い「マリーゴールド」が選択されました。平成2年に0.4haの試験栽培から始まったマリーゴールド栽培は、線虫類の防除効果とともに、その圃場からの農作物の品質の良さが認められて、徐々に栽培面積を拡大します。平成6年からは野菜品質向上対策事業として展開し、試験栽培の結果からマリーゴールドは「アフリカントール」を移植し、栽培日数は90日以上を確保すること、また、一回のマリーゴールド栽培で防除効果が3年間持続することから、4年に一度の栽培を大根・人参の圃場を実施することなどが目標となりました。七飯町、JA、生産者の三者で基金を創設し助成したことで、マリーゴールド栽培面積は拡大し取り組みの継続性が図られています。

その後、「七飯町クリーン農業広報活動推進委員会」を平成7年に設立、「安全で安心な野菜」の購入を求める消費者動向に応じて、七飯町の野菜生産組合の実践的取り組みをPRする積極的な試みを始めました。

クリーン農業を視覚的にアピールする マリーゴールド栽培

減農薬で高品質の農作物を生産するマリーゴールド栽培の圃場は、安全でクリーンな農業

生産を標ぼうするにふさわしく、美しい農村景観を視覚的にも形成していることから、都市域の人々に大きな説得力を持っています。

七飯町は函館市に隣接していることから、圃場での農業の営みへ消費者の視線が常に注がれます。したがって、生産者は、いつも消費者を意識したクリーン農業の実践と農業環境のあり方を察知して、消費者と生産者との信頼関係を築く農業活動を目指しているといえます。7月中旬から下旬にかけての手植え作業は暑くて厳しいですが、自分の畑を守る組合員の強い意志を感じます。国道を通過するドライバーにも沿道のマリーゴールドの農村景観は好評で、「マリーゴールド栽培」は、クリーン農業者の意志と実践とを農村景観の形で視覚的にアピールできる、貴重な試みであると思います。

七飯町野菜生産出荷組合のマリーゴールドによるクリーン農業の取り組みは、「わが村は美しく一北海道」運動第1回コンクールの景観部門「特別賞」を受賞しました。その後、作付け面積は10.5ha（16%）増加し、現在74.5haと栽培が拡大しています。平成16年度には「マリーゴールド作付圃場位置図」が作成され、栽培農業者のクリーン農業にかける思いが伝わってきます。また、来訪者にとっては、マリーゴールドの農村景観を鑑賞できる圃場の位置がすぐにわかり、マップづくりは意欲的な実践であると評価できます。しかし、農村景観は、マリーゴールドだけではなく、地域のいろいろな要素の総合的な関わりのなかで成立し形成されています。

今後はこの農業の結束力が、圃場だけでなく農家周辺や農道や防風林など、農村景観のさまざまな構成要素の整備へと波及し、農業生産と日常生活の営みが共存する、魅力ある美しい農村景観の形成へと展開していくことが望まれるでしょう。



花フェスタ綺羅街道から花開く 地域活性化

景観部門・特別賞

ニセコ21世紀まちづくり実行委員会（ニセコ町）

レポーター 野本 健

ニセコ町は、ニセコアンヌプリや羊蹄山などの山並みの景観とそれらをいかした冬季リゾート、ペンションで知られてきたが、近年はカヌーやラフティングなど、観光のアクティビティの幅を広げてきた。さらに、山麓に広がる農村景観やその農地で生産される新鮮な農産物も注目を集めている。

ここに今また新たに、市街地における花植栽などの取り組みが文字通り花開き、地域住民のコミュニティ形成に大きく寄与し、さらには多くの観光客が街並み景観ともてなしを目的として市街地を訪れるようになった。

市街地の街並みを花で飾る

ニセコ市街地の町並み景観はよく整備され手入れがいきとどき、確かに美しい。「ニセコ花フェスタ綺羅街道」は、この中心市街地と国道5号の道の駅「ニセコビュープラザ」を結ぶ。道路の両側の建物・看板が統一化され、歩道にもレンガブロックが敷かれる。歩道には、住民によって植栽された色とりどりの花が咲き、椅子・テーブルも置かれ、そこは人々が集まりゆっくりと観賞することができる井戸端会議の場ともなっている。

花壇には、インパチェンスやグランドカバーのツルピンカなど形質の異なる花木が趣味よく植栽され、バス停に吊り下げられたハンギングとともに、技術の高さをうかがわせる。商店の前には、住む人がプランター植栽によってそれぞれ個性あるガーデニングを施し、あちこちの空き地にもコニファー類と一年草の組み合わせなどによるポケットパークが整備されている。まさに百花繚乱である。

花壇などのハードばかりではない。花をテーマとしたフォーラムやシンポジウムの開催は平成16年には10数回を数えるという凝りようである。フラワーマスターも30数名を擁するといひ、まさに、花を核とした「まちづくり」といえる。

花が育てる地域コミュニケーション

植栽と手入れは、商店街の住民ばかりでなく、

ペンション経営者や農家などさまざまな人々が参加して行われている。この取り組みは、花の導入を契機に地域のコミュニケーションを復活させ、町内の一体感を醸成しようという目的で実施されたもので、普段の生活においてもみんなが街へ出てきて会話にたくさんの花が咲くようになったという。

事務局長の裕学^{はざま}さんはいは「商店街とペンションは遠いが、話し合い、ともに取り組むことでその距離は縮まる」、「今ではひと声掛ければ数10人が集まってくることが宝である」と。花の取り組みを通して、地域のコミュニケーションの復活がまさに達成された。作戦は成功である。

さらに広がる地域活性化、花を目指す来訪者

ここでの花は、実行委員会のもくろみどおり、目的というよりむしろまちづくりの手段として位置づけられる。さらに今では、さまざまな波及効果を及ぼし、地域活性化のけん引力になっているのである。実際、このニセコの花で彩られた街を年間4,000人ももの観光客が訪れ、街道での急ごしらえのテントで振る舞われる馬鈴薯やトウモロコシに舌鼓を打つ。

今でこそ、多くの賞を受賞し脚光を浴びているが、多くの街づくりがそうであるように、この取り組みも、これまでの地道な活動があったことである。その下地は昭和63年にさかのぼる。昔からまちづくりにかかわる牧野純二さんは、大プランターを運ぶ重機の手を休め、「田舎にも人だまりのある里を目指してきた。今ようやく実を結びつつある」という。

4年目に入った「ニセコ21世紀まちづくり実行委員会」は、商店街活性化、農業活性化、観光活性化、フラワーデザイン、地域活性化の5



レンガブロックの歩道に配置された花壇植栽とテーブル。各商店の前はそれぞれにガーデニング。井戸端会議や散策も楽しそう。



綺羅街道の一方の端、道の駅「ニセコビュープラザ」と羊蹄山。左側の農産物直売所では、顔の見える生産者による新鮮な農産物が大人気。

部会で構成されているが、今まさに各部会が有機的に結びつき、「まちづくり」に向けて本格稼働を始めたのである。

これからの夢を運ぶシーニックバイウェイ

今後は、誕生日などの記念植樹や名前を刻んだプレートなどにより、地域の人々の物語・心を形に残していきたいという。また、「マンネリといわれても、持続が肝心、そして、ソフトのまちづくりは住民がいる限り継続していくもの」と、長く続けるためのNPO法人化計画などについて熱く語った。

これらの思いと取り組みが評価され、この「花フェスタ綺羅街道」は、地域の景観や自然環境などの魅力を道でつないでいこうという「シーニックバイウェイ制度」のモデルルート、千歳～ニセコルートとしても位置づけられ、より広域的な連携を可能とする舞台を得た。まちづくりへの熱い思いと地道な住民の協働は、今では羊蹄山の裾野のように大きく広がり、地域を超えた新たな交流や活性化に結びついたのである。

コスモスは景観の優しいサポーター

景観部門・銅賞

上斜里フラワーロード推進協議会（清里町）

レポーター 梅田 安治

上斜里フラワーロード推進協議会は、道々摩周湖斜里線の清里町内で知床斜里方面からの入口部分に農地をもつ農家11人によってつくられ、平成5年から道々沿いのそれぞれの農地にコスモスを栽培して、農村景観づくりの一環としてきた。それがやがてコスモス・ロードと多

くの人々に呼ばれるまでになって10年以上経過した現在、ときには辛いこと、コスモス連作の不安などもないわけではないが、それを埋めてくれる楽しさがあるという。コスモスのベルトゾーンを道路端の農地につくることが日常化してしまったということであるのだろう。

身の丈に合わせた活動が持続の要因

コスモスの種播きは全員の共同作業であるが、その後の生育管理の作業は共通の時間の確保が困難であることから、各人がそれぞれの地先の部分を農作業との関連などで個々に実施している。このようにあまり無理のかからない、各自に自由度を大きくとった、いわゆる各人の都合、身の丈に合わせたことが、この活動を持続させた大きな要因であろう。また、そのことが、良い意味での競争意識を醸成させ、コスモスを3.5kmにわたり夏から霜の降りる秋まで見事に咲かせるという成果を得ているのであろう。

美しくて見られ、見られて美しく

さらには、背景として斜里岳を有することなどから、写真撮影なども多くの人によってなされるようになり、いわゆる「美しくて見られ、見られて美しく」ということで活性してきたのであろう。

道路の交差点脇にある一本のポプラもよくみると、道路のセンターを少しずらすことで残されたようだ。その向こうには数年前に地元の人たちで植えたというポプラが並木として育っている。駐車帯も設置され、さらに多くの人たちの注目を得るようになった。

その近くの農家の伊藤さんは車から降りてカメラポイントを探している人を見るとうれしく楽しくなり、苦労も飛んでいくとっている。そして圃場があるのでコスモスは植えているが、住居の離れている畠山さんはその喜びはないと残念がっている。でも何かしら地域の人々と直接連なりあうことはない人たちではあるが、楽しく見てくれる人のいることはうれしいという。そして、地域の人たちの原動力となるのが、忙しい農作業の間をぬって黙々とコスモスづくりを背中で見せている佐藤会長なのである。

町内全般の景観意識へも大きな影響を与え、例えば市街地商店街の花飾りも近年著しく盛んになっている。もともと各種のクラブ活動が盛



道々沿いの農地にコスモスを栽培

んな清里町の特徴として、活動の伝播は早いとのことである。道々沿線農家のこの地道な活動は多くの時間を要したが、それだけに確実に地域に定着してきたということであろう。

一方、道路の法尻^{のりじり}の農地部分でのコスモス栽培であるため、花がようやく路面の高さに達するという状況にある。この状況改善のため、現在も道路曲線内側部分の花帯幅を広くするなど工夫もされているようであるが、コスモスの額縁に囲まれた農地・圃場として評価できる日を期待する。そのためにも、実施するのは大変なのだろうが、現在の道々のみでなく、道々と交差する道路沿いにも花帯を造成すると、視覚的には面的広がりを与えて一層印象的な景観となるであろうなどと考えると楽しくなってくる。

農村景観は生活文化の発現

馬鈴薯、小麦、ビート、牧草……と連坦する農地、その向こうに防風林に裾をかくした斜里岳が近くにそびえている。ここへ来るまでは道標のように見えていた山も近くなると厳しさが強くなっていく。それを和らげてくれるのが足元のコスモスである。

コスモスは景観の優しいサポーターなのである。さらに美しくと望まれるのは美しきものの宿命である。農地・農村の景観はそこで営まれている農業の生産性を核とする豊かさを形成・持続する生活文化の発現そのものである。形質的なものは農地・圃場のなりゆきに大きく支配される。それを大きく支配するのは風・光などである。その中で生活・生産をすすめる農家・地域の人たちが充実感を満足するような状況こそが地域の希まじき状況であり、その表象が景観なのである。

江戸時代の“百姓伝記”によると、水路の法

面、法肩などの形状保全のためにヨシ、スゲなどを植栽することを推奨している。コメをはじめとする多くの農作物の栽培法などを示しているこの農書は、屋敷まわりをはじめ地域の環境・機能保全にまで言及している。“百姓伝記”の現代版を出すならば、道路脇には花を、コスモスをとという項が入ることだろう。

いま、農村地域の多面性などが論じられているとき、道路は農村地域の玄関であり、ときにはロビーともなるものである。それをまずはこの地域の景観的展開のマイル・ストーンとして置くことによってさらなる発展のあることを期待する。



播種作業

profile

野本 健 のもとけん

1953年東京生まれ。'77年北海道大学農学部農業工学科卒業。助北海道農業近代化コンサルタント、(株)ルーラルエンジニアを経て、助北海道農業近代化技術研究センター総括研究部長。専門は農業土木、農村計画で、農村景観、農村環境にかかわる調査・計画・研究に従事。著書『農地・農村の景観』（共著）、「北海道の農業と農村—寒冷な環境の克服—」（共著）など。農学博士。

中井 和子 なかい かずこ

1949年東京生まれ。'73年日本女子大学住居学科卒業。G.K.インダストリアルデザイン研究所勤務、フランス政府給費留学、筑波大学大学院修士課程を経て、'79年から(有)中井建築研究所環境デザイン室主宰。北海道教育大学非常勤講師。札幌市都市景観審議会委員。北海道開発局景観アドバイザー。著書『まちの色彩作法』（共著・都市文化社）、「北海道と環境保護」（共著・札幌学院大学人文学部編）など。

梅田 安治 うめだ やすはる

1932年札幌生まれ。'55年北海道大学農学部卒業。同大学助手、助教授、教授を経て、'98年から農村空間研究所長。北海道田園委員会委員。わが村は美しく—北海道運動第2回コンクール審査委員長。著書『やはり 土地改良の周辺』『農地・農村の景観』『農村公園』『農地・農村浴』『農村計画学』『農業利水と地域の資源・環境』『農業・農村と地域の生態』など多数。北海道大学名誉教授、農学博士。